

自己抑制力を育成する 「死の教育」学習プログラムの開発

— 小学校2年生を対象として —

毛 月

Development of a “Death Education” Learning Program to Foster Self-Control
— Aimed at second grade elementary school students —

Yue MAO

Abstract: We developed a “death education” learning program using teaching materials dealing with death-related content from a second grade elementary school moral education textbook. In this article, we provide suggestions for solving the problem of bullying among second grade elementary school students through making them aware of the fear of death and grief and that there are things they should not do, and developing self-control. A three-hour “death education” learning program combining a lesson on death, a lesson on compassion, and a lesson on self-control was conducted at K Elementary School, the practice school, and a lesson on self-control was conducted at M Elementary School, the control school. Through the analysis of worksheets after the class on self-control, we clarified the differences in the children’s consideration of self-control and examined whether the “Death Education” learning program was linked to the development of a perspective that leads to the control of aggressive behavior. The results revealed the following two points. First, the “Death Education” learning program, which consisted of a lesson on death, a lesson on compassion, and a moral lesson on internal self-control, may lead to the development of a desire to make decisions according to one’s own conscience, even if it is not in one’s own interest. Second, through the “Death Education” learning program, students could think of specific ways to calm themselves down. In the future, we aim to further improve the structure of the program to foster self-control by using different teaching materials and changing the order of the lessons.

Key words: moral education, education on respect for life, death education, practical research
キーワード：道徳教育，生命尊重教育，死の教育，実践研究

1. 問題の所在と研究の目的

近年、日本における学校でのいじめの低年齢化が深刻になっており、社会問題にもなっている。中でも、歴年の文部科学省「児童生徒の問題行動・不登校等生徒指導上の諸課題に関する調査」が示すように、2016年から小学校2年生のいじめ認知件数が一番多くなっていることは注目に値する（毛，2023）。

このような状況に対して、小学校学習指導要領解説総則編（文部科学省，2017）では、「いじめによる自殺などが社会的な問題となっている現在、児童が生きることの喜ぶとともに、生命に関する問題として老いや死などについて考え、他者と共に生命の尊さについて自覚を深めていくことは、特に重要な課題である。」

と指摘されている。本論では、死に関する内容を取り上げた道徳授業を「死の教育」と記す。

これまで、死を教えることを通していのちの大切さを気づかせる「死の教育」の授業実践は行われてきた。例えば、井上・岡田ら（2005）が小学校2年生を対象として実施したベットの死を題材にいのちや生きることを考えさせる授業実践、及び倉澤・竹鼻（2021）が小学校5年生を対象として実施した死の知識といのちの大切さの両面を考えさせる授業実践があげられる。

一方、いじめ対策として、加害行為をする側の道徳性の向上という予防的な取り組みに注目することが重要だと考えられる。ピアジェ（Piaget, J. / 大伴茂訳，1954）は、道徳性を規則に対する尊敬と捉えた。いじめをしてはいけないという規則の本質は、いのちを傷

つけてはいけないことである。つまりいのちの大切さを教えるだけでは不十分であり、いのちを傷つける行動を抑制できる能力である自己抑制力の育成も重要だと考えられる。そこで本論では、「死の教育」を、いのちの大切さを教えることと、自己抑制力の育成の両面に関わるものとして捉えることにする。

「死の教育」を行う際の困難な点として、3点が挙げられる。第1に、死に対するタブー視という社会的雰囲気の問題である。第2に、「死の教育」に関する専門的知識や技能の不足、指導方法開発の不十分さ、学校全体で取り組むことの難しさという教師側の問題である。第3に、一般的に認められた「死の教育」を含んだプログラムが作成されていないことと効果検証方法が確定されていないことなど実践上の問題である(毛, 2020)。本研究では、実践上の問題に注目し、「死の教育」を含んだプログラムの開発を行うこととした。

小学校2年生を対象とした「死の教育」を含んだプログラムとして、大曲・石丸(2011)があげられる。大曲・石丸(2011)はセルフ・エスティームを育成する授業と死に関する授業など複数の授業を組み合わせ、生命尊重教育の範囲を超えた「死の教育」を含んだプログラムを開発している。大曲・石丸(2011)の提案は、小学校2年生においていじめが多いという課題に対し、いのちの大切さに気づかせるということによって予防的な取り組みになるといえるが、加害行為を抑制することに直接結びついてはいない。小学校2年生におけるいじめを予防するためには、加害行為を抑制することにつながる「死の教育」を含んだプログラムの開発が必要だと考える。

そこで、本論では、大曲・石丸(2011)を参考に、児童の自己抑制力の育成に注目し、小学校2年生の道徳科教科書にある死に関する内容を扱った教材を使い、自己抑制力を育成する「死の教育」を含んだプログラムを開発する。本論では開発するプログラムを、「死の教育」学習プログラムと呼ぶことにする。このプログラムを行うことにより、死の恐れや悲しみなどに気づかせることで、してはいけないことがあることに気づかせ、自己抑制力を育てることを通して、小学校2年生のいじめ問題の解決のための示唆を得ることを目的とする。

2. 研究の方法と授業実践の概要

(1) 調査対象

H県K小学校2年生の生徒 14名(男5名,女9名)

H県M小学校2年生の生徒 20名(男8名,女12名)

(2) 分析対象

本研究では、「死の教育」学習プログラムとして、3つの道徳授業を行う。分析対象とするのは、「死の教育」学習プログラムを構成するそれぞれの道徳授業内でのワークシート、及び「死の教育」学習プログラム終了後のワークシートに記入された児童の意見である。ワークシートに書かれた意見の妥当性を確認するために、授業後に行った授業担当の教員へのインタビューも参考にする。

(3) 手続き

①プログラムの構成と教材の選定

本研究では、「キリンのみなみ」(廣済堂あかつき)を使った死に関する道徳授業(以下、死に関する授業)、「くりのみ」(日本文教出版)を使った思いやりに関する道徳授業(以下、思いやりに関する授業)、「ねこがわらった」(光文書院)を使った自己抑制に関する道徳授業(以下、自己抑制に関する授業)を組み合わせた3時間の「死の教育」学習プログラムを作成した。

死に関する授業は、死の恐れや悲しみ、及びいのちの大切さを教えるための授業として設定された。教材選定手続きについては、現行の小学校2年生の道徳科教科書における死を取り上げた教材16本について、教職大学院の現職教員学生(以下、現職教員)3名を対象に、「この教材は児童が死について考える教材としてふさわしいと思うか」について、「全然思わない」1点、「あまり思わない」2点、「どちらとも言えない」3点、「やや思う」4点、「とても思う」5点とする5件法で評価させた。そして、3名の合計点を算出し、それぞれの得点が3点以上且つ上位が5位になった教材を候補とした。研究授業実施教員の一人であり、K小学校の道徳教育推進教師であるA教諭と検討した結果、「キリンのみなみ」(廣済堂あかつき)を選定することにした。

思いやりに関する授業は、中里(1985)が指摘したように、愛他心の希薄さは犯罪の質の悪化につながることを踏まえ、加害行動の抑制のためには相手の気持ちを考えさせる必要があると判断して設定された。教材選定については、A教諭と検討した結果、思いやりを教える教材の定番である「くりのみ」(日本文教出版)を選定することにした。

自己抑制に関する授業は、してはいけないことを児童に気づかせ、自己抑制力を育てるために設定した。教材選定について、2020年11月に「きいろいベンチ」(学研)を使って2年生を対象として予備的な授業を実施した。その結果、自己抑制力の育成については、きまりを守ることを教えるのでは不十分であり、良心に

自己抑制力を育成する「死の教育」学習プログラムの開発
 — 小学校2年生を対象として —

従って自分の行動を抑制することを教える必要がある した結果、自分の良心に問かける内容の「ねこがわ
 判断し、教材を変更することにした。A 教諭と検討 らった」(光文書院)を選定することにした。

表1 研究計画

研究日程	対象校 K小学校(実践校)	M小学校(対照校)
6月22日	死に関する授業「キリンのみなみ」 ワークシート提出	
6月29日	思いやりに関する授業「くりのみ」 ワークシート提出	
7月6日(K) 7月7日(M)	自己抑制に関する授業「ねこがわらった」 ワークシート提出	自己抑制に関する授業「ねこがわらった」 ワークシート提出
7月9日	プログラムについてのワークシート提出	

資料1 自己抑制力を育成する「死の教育」学習プログラム構成及び略案等(3時間)

【第1時】死に関する授業

学習教材 「キリンのみなみ」(廣済堂あかつき)

ねらい キリンのみなみの死をお父さんから聞き、お父さんの言葉に泣きながらうなずきみおちゃんの心情を考えることを通して、元気に生きていたみなみが死ぬことの辛さや悲しみから生命のかけがえのなさに気付き、生きていることのすばらしさから生命を大切にしていこうとする道徳的心情を醸成する。

主な発問 ○朝やってきた飼育員の人は冷たくなっているみなみをみてどんな気持ちになったでしょう。

○みなみはどんな気もちだったのでしょうか。

○お父さんの言葉を聞いてなきがらうなずいたのは、どんなことが分かったからでしょう。

○自分の生命や身のまわりの生き物の生命を大切にするためにできることを考えよう。

【第2時】思いやりに関する授業

学習教材 「くりのみ」(日本文教出版)

ねらい 自分が見つけたどんぐりを隠したきつねがうさぎからやってみつけた二つの栗の実の一つを差し出され涙を流す気持ちを考えることを通して、思いやりの気持ちの大切さに気付き、相手の気持ちを考えて親切にしていこうとする道徳的心情を養う。

主な発問 ○きつねはどんな気持ちでどんぐりを隠したのでしょうか。

○きつねはどうして「何も見つかりませんでした。」と言ったのでしょうか。

○うさぎから栗の実を差し出され涙を流すきつねはどんな気持ちだったでしょう。

○優しくしたり優しくされたりして、嬉しかったことはありますか。

○学びを振り返り、優しい気持ちについて考えたことを書いてみましょう。

【第3時】自己抑制に関する授業

学習教材 「ねこがわらった」(光文書院)

ねらい テストで一つ間違った答えを書き直そうとする姿を見たねこが笑ったような気がした一ちゃんが、いやな気持ちになった後の行動やその理由を考えることを通して、うそをついたりごまかしたりすると暗い気持ちになることに気づき、自分のしたことを素直に認め、明るい心で楽しく生活していこうとする道徳的心情を養う。

主な発問 ○一つだけの三角を見た一ちゃんはどんな気持ちになったでしょう。

○三角を丸にしている一ちゃんはどんな気持ちだったでしょう。

○やりかけていることを考えたいいやな気持ちをなくすために、一ちゃんはどうするでしょう。また、それはどんな理由でしょう。

○こっそりごまかそうとして一ちゃんみたいにいやな気持ちになった人は、いますか。

○学びを振り返り、生命について考えたことを書いてみましょう。

②研究計画（2021年6月～7月）

「死の教育」学習プログラムの実施は2021年6月22日～7月9日とした。研究計画は表1の通りである。

K小学校とM小学校は、同じ市内にあり、学校規模もほとんど同じである。また、両校とも生命尊重教育を重点的に行っている。授業担当教員もそれぞれの学校で研究授業を行うなどしており、本研究での実践校、対照校として適当だと判断し、依頼した。

K小学校では、死に関する授業、思いやりに関する授業、自己抑制に関する授業を実施した。効果を確認するために、ワークシート調査を4回実施した。ワークシートは、3回の道徳授業内と、「死の教育」学習プログラム終了の翌日に行った。対照校M小学校では、自己抑制に関する道徳授業内にワークシート調査を行った。

研究計画は2つの内容で構成された。1つ目は、自己抑制に関する授業後のワークシートの分析を通して、「死の教育」学習プログラムを実施したK小学校とM小学校での、子どもの自己抑制についての考え方の違いを明らかにすることである。2つ目は、「死の教育」学習プログラムを行うことが、加害行為の抑制につながる考え方を育成することにつながっているかどうか、確認することである。

③授業の概要

K小学校での道徳授業はK小学校の該当学級の学級担任と道徳教育推進教師であるA教諭がT.Tで行った。各授業のワークシートは、授業内に書かせ、授業終了後学級担任が回収した。プログラムについてのワークシートは、プログラム終了の翌日の授業外に児童に記入させ、学級担任が回収した。記入時間は10分程度であった。ワークシートの記述内容の確認のため、プログラム終了後、研究授業実施教員2名に対して30分程度のインタビュー調査を行った。教材や略案は資料1の通りである。

M小学校での道徳授業は、学級担任が行った。道徳授業内にワークシートを書かせ、授業後に学級担任が回収した。ワークシートの記述内容の確認のため、K小学校の研究授業実施教員と同じときに一緒に30分程度のインタビュー調査を行った。

(4) 研究仮説

① K小学校の児童が自己抑制に関する授業でワークシートに記入した意見と、M小学校の児童が自己抑制に関する授業でワークシートに記入した意見を分析すれば、「死の教育」学習プログラムによる学習効果が明らかになるだろう。

② K小学校の児童がプログラム終了後にワークシートに記入した意見を分類すれば、プログラム全体の効果が明らかになるだろう。

3. 児童がワークシートに記入した意見の分類結果と考察

K小学校の児童が3回の道徳授業でワークシートに記入した意見の分類結果及びM小学校の児童が自己抑制に関する授業後に記入した意見の分類結果（表2）、K小学校の児童が「死の教育」学習プログラム終了後のワークシート質問1、質問2に記入した意見の分類結果（表3、表4）を検討していく。

(1) 「死の教育」学習プログラムの学習効果について

児童の意見の分類にあたっては、児童がワークシートに記入した意見を、分節（意味を持つ単位の区切り）と文（1センテンス）に区切り、分節と文を分類対象とした。分析手続きとして、まず、筆者は児童が死に関する授業、思いやりに関する授業、自己抑制に関する授業でのワークシートに記入した意見を、死についての考え、愛他性、自己抑制を表すカテゴリーに分類した。その後、大学院学生3名が独立して分類の妥当性について確認作業をし、相談しながら一致させた。

1つの分節や文が複数のカテゴリーに属する場合は、それぞれのカテゴリーに分類した。カテゴリーに分類できなかった意見は、分類対象から除外した。なお、道徳授業でのワークシートの記述の掲載にあたっては、個人が特定されないための修正のみにとどめ、できる限り書かれたままの表現にしている。

カテゴリーを詳しく説明する。

死に関する授業でワークシートに記入した意見の分類にあたっては、毛（2023）が設定した【死の無機能性】、【死の非可逆性】、【死の原因】、【死の普遍性】、【悲嘆のプロセス】、【死の感情】、【いのちの大切さ】、【加害抑制】という8つのカテゴリーを参照にした。

思いやりに関する授業でワークシートに記入した意見の分類にあたっては、中里（1985）を参考にして、思いやりを特徴的に示す【愛他行動】と【愛他動機】を分類のカテゴリーとした。

【愛他行動】は、「自分の利益を少なくとも他の個人の利益になる行動をすること」を示す（中里1985,11頁）。例えば、「クリをあげた」、「見つけたらわたしのをあげる」のような分配行動に気づいたこと、あるいは分配行動を取ろうとすることを示す記述である。

【愛他動機】は、人は他人（動物であってもいい）

自己抑制力を育成する「死の教育」学習プログラムの開発
 — 小学校2年生を対象として —

の心理的・生理的苦痛に共感し、この共感性の生起により崩された心のバランスによって、もとの安定した心理状態に戻そうとする方向性を持った動機を示す(中里, 1985)。例えば、「あげないとしんじょうから」のように相手を思っていることを示す記述である。

自己抑制に関する授業でワークシートに記入した意見の分類にあたっては、ピアジェ (Piaget, J. / 大伴茂訳, 1954) 及び中里 (1985) を参考に、自分自身が認める基準によって自分の行動を抑制することを【内的自己抑制】とし、外的な制御によって自分の行動を抑制することを【外的自己抑制】として、これらを分類の 카테고리とした。

【内的自己抑制】は、外的な制御の有無にかかわらず、児童が行動の制御をある程度内在化し、自分自身に認める基準によって自分の行動を抑制することを示す。例えば、「ずるがしこいのがだめ」、「けさないのがたいせつだ」のように自分自身が認める基準によって自分の行動を抑制することを示す記述である。

【外的自己抑制】は、児童が外的な制御によって自分の行動を抑制することを示す。例えば、「正直にいったらおこられないから」、「正直にいったらほめられるかもしれないから」、「(他の人に・筆者注) 見られるから」のように外的な制御によって自分の行動を抑制

することを示す記述である。

①死に関する授業でのワークシートの分析

死に関する授業では、質問1「『みなみが教えてくれたことをわすれてはいけません。』というお父さんのことば聞きなすいたのは、どんなことが分かったからでしょう。」、質問2「今日の学習で心に残ったことや分かったことを書きましょう。」を設定した。なお、質問1、質問2に対する答えはどちらも児童が授業内容に対する理解に基づくと考え、質問ごとに区分せず分類した。

死に関する授業でワークシートに記入した意見を、【死の無機能性】、【死の非可逆性】、【死の原因】、【死の普遍性】、【死の感情】、【いのちの大切さ】という6つのカテゴリーに分類した。【悲嘆のプロセス】及び【加害抑制】に関する記述は、見られなかった。6つのカテゴリーに分類された意見は、全部で43個であった(個数は延べ数)。以下に結果を示す。

【死の無機能性】に関する記述は5個であり、死に関する授業での記述全体の12%を占めた。内容から見ると、「あえなくなった」という肉体の消滅に関する記述(1個)、及び「あかちゃんがうまれない」という機能の停止に関する記述(4個)であった。

表2 K小学校及びM小学校の児童が道徳授業でのワークシートに記入した意見の分類結果

授業内容	K校			M校	
	カテゴリー	個数(%)	内容	個数(%)	内容
死に関する授業	【死の無機能性】	5(12%)	肉体の消滅、機能の停止		
	【死の非可逆性】	3(7%)	残る人の立場、死んだ人の立場、すべての人間の立場		
	【死の原因】	5(12%)	肉体の原因、人間の行動		
	【死の感情】	27(63%)	悲しみ、同情、怖さ、悔しさ、寂しさ		
	【いのちの大切さ】	3(7%)	いのちの大切さの発見		
(カテゴリーに分類された意見の総数は43個である。)					
思いやりに関する授業	【愛他行動】	26(84%)	分配、援助、相手を大事にする		
	【愛他動機】	5(16%)	相手への同情、相手への優しさ		
(カテゴリーに分類された意見の総数は31個である。)					
自己抑制に関する授業	【内的自己抑制】	16(62%)	規則への尊敬、道徳的判断	18(55%)	規則への尊敬、道徳的判断
	【外的自己抑制】	10(38%)	大人への畏服、周りの目、リスク回避	15(45%)	大人への畏服、周りの目、リスク回避
(カテゴリーに分類された意見の総数は26個である。)					
(カテゴリーに分類された意見の総数は33個である。)					
(小数点以下四捨五入にしたため、総計が必ずしも100%にならない。)					

【死の非可逆性】に関する記述は3個であり、死に関する授業での記述全体の7%を占めた。内容から見ると、「しんだらあえない」という残る人の立場を立った記述（1個）、「しんだらいのちがなくなる」という死んだ人の立場を立った記述（1個）、及び「人げんのいのちは一つしかない」というすべての人間の立場に立った記述（1個）であった。

【死の原因】に関する記述は5個であり、死に関する授業での記述全体の12%を占めた。内容から見ると、主には「ビニールブックをたべてしんでしまった」という肉体的原因に関する記述（1個）、及び「にんげんがビニールをすてたからにんげんのせいです」、「町の人びとがビニールブックをすてたのにしいくいんがとらなかつたからみなみがしんだ」という人間の行動に関する記述（4個）であった。

【死の感情】に関する記述は27個であり、死に関する授業での記述全体の63%を占めた。内容から見ると、主には「かなしい」という悲しみを表す記述（17個）、「かわいそう」という同情を表す記述（4個）、「しんでいやなきもち」という怖さを表す記述（1個）、「うまれるまで生きてほしかった」、「みなみにたべたらいけないことをおしえとつたらよかつた」という悔しさを表す記述（3個）、「しんだらさびしい」という寂しさを表す記述（1個）、及び「にんげんのせいです」という怒りを表す記述（1個）であった。

【いのちの大切さ】に関する記述は3個であり、死に関する授業での記述全体の7%を占めた。内容から見ると、「いのちがたいせつだと思いました」、「いのちのことをわすれたらかわいそう」、「だってみんないのちがあるもん」といういのちの大切さを気づいたことに関する記述であった。

②思いやりに関する授業でのワークシートの分析

思いやりに関する授業でのワークシートには、質問1「きつねは、どうしてなみだをながしたのでしょう。」、質問2「今日の学習で心に残ったことや分かったことを書きましよう。」を設定した。なお、質問1、質問2に対する答えはどちらも児童の授業内容に対する理解に基づくので、質問ごとに区分せず分類した。

思いやりに関する授業でワークシートに記入した意見は、全部で31個であった（個数は延べ数）。以下に結果を示す。

【愛他行動】に関する記述は26個であり、思いやりに関する授業での記述全体の84%を占めた。内容から見ると、主には「くりをあげた」、「くりをくれた」、「くりをもらった」、「わたしも見つけたらわたしのをあげる」という自分が有するものを他者に分けようと

する分配行動に関する記述「23個」、「とんぐりのぼしよをおしえてあげた」、「かわいそうだとおもってあげた」という援助を必要としている人に援助を与えようとする援助行動に関する記述（2個）、及び「友だちをだいににする」という相手を大事にする事に関する記述（1個）であった。

【愛他動機】に関する記述は5個であり、思いやりに関する授業での記述全体の16%を占めた。内容から見ると、主には「うさぎさんがやさしい。わたしもそんなひとになりたい」という相手への優しさに関する記述（1個）、及び「あげないとしんじょうから」という相手への同情に関する記述（4個）であった。

③自己抑制に関する授業でのワークシートの分析

自己抑制に関する授業でのワークシートには、質問1「いやあな気もちをなくすために一ちゃんは、どうするでしょう。また、それはどうしてでしょう。」、質問2「今日の学習で心に残ったことや分かったことを書きましよう。」を設定した。なお、質問1、質問2に対する答えはどちらも児童の授業内容に対する理解に基づくので、質問ごとに区分せず分類した。K小学校、M小学校で設定した質問は、同じであった。

K小学校の児童の意見は、全部で26個であった（個数は延べ数）。以下に結果を示す。

【内的自己抑制】に関する記述は16個であり、記述全体の62%を占めた。内容から見ると、主には「ずるがしこいのがだめ」、「正じきに言うのがたいせつだ」という、規則への尊敬に関する記述（11個）、及び「さんかくをけさずに、じぶんで書きなおしたら、こんど100点になるかもしれない」、「まちがいだれでもあるから」、「じょうじきにいわとなおらない」という、良くなることへの希望を示す道徳的心情に合わせて判断しようとする記述（5個）であった。

【外的自己抑制】に関する記述は10個であり、記述全体の38%を占めた。内容から見ると、主には「先生にしょうじきにいったらほめられるかもしれないから」、「ずるをしておこられるのがだめ」という大人への畏服に関する記述（4個）、「たまに見られたから」という周りの目に関する記述（4個）、及び「先生とかは赤いボールペンや赤いマジックで丸するけど、一ちゃんは赤えんぴつで丸したからやめた」（2個）というように、書き直したことがわかってしまうリスクを回避することに関する記述であった。

対照校であるM小学校の児童の意見は、全部で33個であった（個数は延べ数）。以下に結果を示す。

【内的自己抑制】に関する記述は18個であり、記述全体の55%を占めた。内容から見ると、主には「正直

に言う、「うそをついたらいけない」という規則への尊敬に関する記述（5個）、及び「しょうじきに見せて、またこんどのテストのときにじっとがんばろう」、「うそをつくるとどろぼうのはじまりだ」、「うそをついたらこころがいたくなる」、「ウソをついたら、あやまったりちゃんとはんせいをしたりするんだと思う」という、良くなることへの希望を示す道徳的心情に合わせて判断しようとする記述（13個）であった。

【外的自己抑制】に関する記述は15個であり、記述全体の45%を占めた。内容から見ると、主には「しょうじきにいったほうがほめられたり」、「しょうじきに言ったほうがかぞくにおこられずにすむ」という大人への畏服に関する記述（6個）、「たまがこっち見ているから」という周りの目に関する記述（7個）、及び「たまがおかあさんたちにしらせるかもしれない」、「○じゃなくて△にもどしたらうそじゃないってしんじられるから」というように、書き直したことがわかってしまうリスクを回避することに関する記述（2個）であった。

両校の児童の意見の違いについて検討する。

記述の内容から見ると、K小学校とM小学校の児童の意見の内容は、大体同じであった。数について、若干違いはあるが、総数が少ないので、大きな違いと考えることはできないだろう。注目したいのは、カテゴリーに分類できなかった意見である。

M小学校の児童の意見には、【内的自己抑制】、【外的自己抑制】に分類できなかった記述として、「いったんかたづけて、ばれないようにして、たまはしゃべられないからたまのことをしんばいしなくてもいいや」、「たまをおいだす」というような記述が見られた。この教材の中では、たま（猫の名前）は良心を象徴するものとして描かれている。「たまのことをしんばいしなくてもいい」、「たまをおいだす」というのは、良心に従わず、自分が得をする利己的な考えに従うことだと考えられる。このような記述が4個見られた。少ない数ではあるが、このような記述は、K小学校の児童には見られなかったので、K小学校とM小学校の違いを示すものとして注目したい。

M小学校の研究授業実施教員のB教諭に対するインタビューによると、M小学校では授業中にも、「このままばれないようにがんばる」「（ずるいことをしても・筆者注）いい点をとってお母さんにほめられたい」というように、自分が得をする方を選ぶ児童の意見が散見された。授業の中で次第に、ずるいことをするのはいけないことだと気づくようになっていたが、ワークシートの記述に見られるように、授業後もばれなければいいという考えを持った児童もいた。B教諭

は、M小学校では、授業の中で「ねこがいなくなればいい」というような、教材内容について真剣に考えていない意見が散見されたことをあげ、K小学校で行われた死に関する授業や思いやりに関する授業をM小学校でも行っていたら、相手を傷つけてはいけないことが児童に伝わって、自分事として真剣に考えたのではないかと述べていた。

授業内容の理解という点では、両校の児童に大きな違いはなかったが、「ずるいことをしたり、ごまかしたりすること相手の心を傷つける、だからしない」という自己抑制につながる点では、K小学校で行ったプログラムの効果があったと考えられる。

(2) 「死の教育」学習プログラムが自己抑制力の育成につながるかどうかの検討

①プログラム終了後のワークシート質問1の分析

「死の教育」学習プログラムが終了した後、プログラム全体の振り返りとして、質問1「『キリンのみなみ』『くりのみ』『ねこがわらった』の勉強をしましたね。この3つの勉強をして、心に残ったことや分かったことを書きましよう。」を設定した。

表3 K小学校の児童がプログラム終了後のワークシート質問1に記入した意見の分類結果

カテゴリー	個数(%)	内容
【死の原因】	3(17%)	肉体の原因、人間の行動
【死の感情】	5(28%)	同情、恐さ
【愛他行動】	7(39%)	分配
【内的自己抑制】	3(17%)	規則への尊敬、道徳的判断
(カテゴリーに分類された意見の総数は18個である。) (小数点以下四捨五入にしたため、総計が必ずしも100%にならない。)		

ワークシートの質問1に記入した意見を、前述した9つのカテゴリーを参考にして分類したところ、4つのカテゴリーに分類された。これらは【死の原因】、【死の感情】、【愛他行動】、【内的自己抑制】である。4つのカテゴリーに分類された意見は、全部で18個であった（個数は延べ数）。以下に結果を示す。

【死の原因】に関する記述は3個であり、プログラムに関する振り返りの記述全体の17%であった。内容から見ると、主には「ビニールがたままってしんだ」という肉体的原因に関する記述（2個）、及び「にんげんがふくろをすてたのがわるいから」という人間の行動に関する記述（1個）であった。

【死の感情】に関する記述は5個であり、プログラ

ムに関する振り返りの記述全体の28%であった。内容から見ると、主には「しんだのがかわいそう」という同情を表す記述（4個）、及び「わたしもしんだらいやだから」という死への恐さを表す記述（1個）であった。

【愛他行動】に関する記述は7個であり、プログラムに関する振り返りの記述全体の39%であった。内容から見ると、主には「くりのみをあげたのがいい」、
「くりのみをあげたのがやさしい」という分配行動に関する記述であった。

【内的自己抑制】に関する記述は3個であり、プログラムに関する振り返りの記述全体の17%であった。内容から見ると、主には「△をけて○にするのがだめだ」という規則への尊敬に関する記述（1個）、及び「にんげんがふくろをすてたのがわるいから、これからもにんげんがゴミをすてちゃだめだよ」という道徳的心情に合わせた判断に関する記述（2個）であった。

以上のように、児童の意見は、3つの道徳授業のどれかに集中することなく、全体的に分かれている。プログラム全体に対してイメージが残っていることから、質問2の意見もプログラム全体に関わっての振り返りだと考えられる。

②プログラム終了後のワークシート質問2の分析

「死の教育」学習プログラムが加害行為の抑制につながる考え方を育成することにつながっているか確認するため、プログラム終了後、質問2「いらいらしたり、ものをこわしたい気持ちになったりしたときには、どうしたらよと思いますか。」について尋ねた。

質問2に記入した意見を、キーワードを抜き出してサブカテゴリーに統合し、さらには意味のまとまりで整理してカテゴリー化した。その結果、2つのカテゴリー

り、7つのサブカテゴリーにまとめられた（表4）。カテゴリーを<>で、サブカテゴリーを<>で示す。大きく、<自分自身でできること>と、<相手や物との関係に関すること>に分けられた。なお、児童一人ひとりの考え方を把握するため、ここでは意見の個数ではなく、意見を書いた児童の人数を示した。

<自分自身でできること>は、いらいらしたり物を壊したい気持ちになったりした時のやり方として、自分自身でできることを考える内容であり、サブカテゴリーは<深呼吸する>、<我慢する>、<心をやすませる>から構成された。<深呼吸する>を書いた児童は6名、<我慢する>を書いた児童は2名、<心をやすませる>を書いた児童は1名、総計9名であった。<深呼吸する>は、自分の怒る気持ちをやめて落ち着こうとすることについての記述であった。<我慢する>は、人を傷つけようとする行動を我慢することについての記述であった。<心をやすませる>は、自分のいらいらとした気持ちを自分で調整することについての記述であった。

<相手や物との関係に関すること>は、いらいらしたり物を壊したい気持ちになったりした時のやり方として、相手や物との関係を考える内容であり、サブカテゴリーは<伝える>、<あやまる>、<壊さずに使う>から構成された。<伝える>を書いた児童は3名、<あやまる>、<壊さずに使う>を書いた児童はそれぞれ1名、総計5名であった。<伝える>は、気持ちを優しく相手に伝えることについての記述であった。<あやまる>は、相手にあやまることについての記述であった。<壊さずに使う>は、物を傷つけようとする行動を注意することについての記述であった。

質問1の結果に見られたように、児童はプログラム全体についてイメージを残しており、その結果、深呼

表4 K小学校の児童がプログラム終了後のワークシート質問2に記入した意見の分類結果

カテゴリー	サブカテゴリー	文例	人数
〈自分自身でできること〉	〈深呼吸する〉	「いらいらしたときおこるのをやめるしんこきゅうする」「しんこきゅうしておちつく」「いらいらしたら、まずしんこきゅうをしたらい」「いきをすう」「しんこきゅうをしたらい」「しんこきゅうをする」	6名
	〈我慢する〉	「いらいらしたときものをこわしたい気持ちになったりするときも、がまんしたらいい」「がまんしたらよとおもう」	2名
	〈心をやすませる〉	「いらいらしたときはちょっとこころをやすませてみる」	1名
〈相手や物との関係に関すること〉	〈伝える〉	「いらいらしたらいいきもちで言う」「いやなことがあったらいじわるをされた人にならなかつたことをつたえる」「正じきにゆうのがいいと思った」	3名
	〈あやまる〉	「先生とかにいつてあやまる」	1名
	〈壊さずに使う〉	「ものをこわさずにじょうずにつかう」	1名

吸したり、我慢したり、心をやませたり、相手に思いを伝えたりすることで、自分で自分のいらいらした気持ちを抑えたり調整したりすることを学んだと言える。ここから、「死の教育」学習プログラムは、自分で自分を落ち着かせる方法に気づかせることができると考えられる。このことは、加害行動を抑制する考え方の芽生えにつながると思われる。

4. 成果と課題

本論の目的は、小学校2年生向けの自己抑制力を育成する「死の教育」学習プログラムを開発し、いじめ問題の解決に資する示唆を得ることであった。その結果、成果として以下の2点が得られた。

第1に、死に関する授業、思いやりに関する授業、自己抑制に関する授業で構成された「死の教育」学習プログラムを行うことは、自分の利益にならなくても、自分の良心に従って判断しようとする思いを育むことにつながる可能性があるということである。今回のプログラムでは、死に関する授業で、人間が自分勝手な行動をしたことが重大な結果を招いた事実を学ぶことで、児童の心の中に死の悲しみ、死への同情や恐さなどの感情が引き出された。思いやりに関する授業では、相手への思いやりある行動によって、相手のいのちを救うことができることを学んだ。これらを通して、自己抑制に関する授業では、相手を傷つけないことが第一規則として心の中に形成され、自分の不利益になろうとも、相手を傷つけないことを重視する考え方の育成につながったと考えられる。

第2に、「死の教育」学習プログラムで学習することを通して、自分の心を落ち着かせるための具体的な方法を考えることができるということである。プログラムの3つの道徳授業の中で、深呼吸をする、我慢する、心をやすませるなどの具体的な方法を指導したわけではないが、児童はそれまでの経験などから、いらいらしたときにその気持ちを他者につけるのではなく、相手を傷つけないやり方で、自分の心を落ち着かせることの大切さに気づいたといえよう。直接的に、いじめ加害行動を抑制することではないが、いじめに限らず、自分の心を落ち着かせることの大切さと、そのための具体的な方法に気づいたことは、広い意味でいじめ加害抑制につながると思われる。

今後は、今回の成果を踏まえ、自己抑制力を育成する「死の教育」学習プログラムがいじめ加害行動の抑制につながるような実践研究を進めていきたい。さらには、異なる教材を使ったり、授業の並び方を変えた

りするなどして、自己抑制力を育成する「死の教育」学習プログラムの構成を一層改善していきたい。

本論の一部は、日本道徳教育学会第99回（2022（令和4）年度春季）大会で発表したものである。

引用文献

- 井上ひとみ・岡田洋子ら（2005）「小学生を対象とした Death Education の実践と評価— 小学校2年生の記述内容の前後比較より—」『石川看護雑誌』第3巻第1号 65-75頁
- 大曲美佐子・石丸直子（2011）「小学校低学年を対象とした悲嘆教育の実践と死に関する学習プログラムの開発」『日本教科教育学会誌』第33巻第4号 11-20頁
- 倉澤順子・竹鼻ゆかり（2021）「小学校5年生に対する Death Education の実践と評価」『養護実践学研究』第4巻第1号 3-12頁
- 中里至正（1985）『道徳的行動の心理学』株式会社有斐閣 11頁 54-59頁 114-115頁
- 毛月（2020）「学校における「死の教育」の可能性と課題」『教育学研究紀要』第66巻第1号 405-410頁
- 毛月（2022）「小学校道徳科の生命尊重教育における教材に関する一考察—死に関する内容を扱った教材に注目して—」『教職開発研究』第5号 43-51頁
- 毛月（2023）「いじめ加害行動を抑制する道徳授業の開発に関する一考察 —小学校2年生における死に対する考えや感情の特徴に注目して—」『教育学研究ジャーナル』第28号（印刷中）
- 文部科学省「小学校学習指導要領解説総則編」（https://www.mext.go.jp/component/a_menu/education/micro_detail/_icsFiles/afiedfile/2019/03/18/1387017_001.pdf 2021.10.12最終アクセス）
- 文部科学省「児童生徒の問題行動・不登校等生徒指導上の諸課題に関する調査」（https://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/seitoshidou/1302902.htm 2021.09.04最終アクセス）
- Piaget, J. / 大伴茂訳（1954）「児童道徳判断の発達」『臨床児童心理学Ⅲ』同文書院
- 追記：本研究は広島大学大学院人間社会科学研究所教育学系プログラム倫理審査合同委員会に申請し、承認されている（令和3年6月4日）。承認番号は2021027である。